

階段を上ってください。途中の展望台で眺望を楽しんでから、さらに階段を上って右手をご覧ください。



12. *Pennantia baylisiana*
クロタキカズラ科 植樹 2002年

スリーキングズ島の自然環境に一株の雌株が残っていただけだったため、長い間、世界でも稀有の植物と考えられていました。雄株は絶滅してしまっていたので、子孫を残すことはできなかったのです。1945年に同種を発見したオタゴ大学のベリス博士の名前が付けられています。博士が採集した6本の切り枝のうち3本が根付き、長年にわたってそれらからさらに切り枝が取られました。

思いもよらないことに、そのうちの一株が雄しべと雌しべのある花を咲かせ、そこから生存能力のある種子ができました。本島に生息する葉の小さい遺縁種との雑種交配が容易であるため、その純度について種苗の遺伝子を検査したところ、純粋種と確認されたため *P. baylisiana* は絶滅の危機を免れたのです。現在残る株の遺伝子系統はすべて同一であるため、完全に危機を脱したわけではありませんが、株数は年々増加し、国内各地に定着しています。

あともう少しです。階段の最上部で目の前に見えるのは...



13. キャベツ・ツリー、マオリ名：ティ・コウカ
(*Cordyline australis*)
リュウゼツラン科 植樹 (不明)

ニュージーランドの景色に欠かすことのできない植物で、酷寒地と超乾燥地を除き日当たりのよい場所に自生します。パッと目を引く彫刻的な形状ゆえに、国外の造園家や園芸家たちも好んで使用しています。

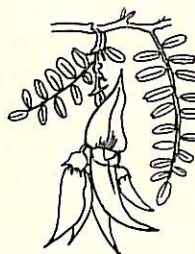
樹幹は枝分かれしないまま12メートル以上に成長します。晩春には、香り高い小花をつけた最大1.5メートルに達する花穂で覆われます。マオリ人は、この木が多くの花をつけた年は暑い夏が来ると言います。

過去には、幼木の樹幹や根を乾燥させてオートミールのように食用していました。

Phormium (NZ亜麻) と共にニュージーランドで発見されたアガーベ属2種の一つです。

車道を通ってヒイラギの生垣を抜け、願いの井戸から本館へ戻ります。そこから城に沿って右側の散策路を進むと頭上にアーチ型の植物が見えます。

14. カカ・ビーク
(*Clanthus maximus*)
マメ科



園内で最も多く花をつける植物を選ぶとしたらこのカカ・ビークでしょう。年間8ヶ月近くも花を咲かせつづき、花蜜を好むスズリの重要な食糧源となっています。

カカ・ビークはマオリ人が観賞用に育てる数少ない植物の一つで、開花した様子をご覧になれば皆様にもその理由がおわかりになるでしょう。

残念なことに、*C. puniceus* と共にニュージーランドの自然環境に自生する2種の *Clanthus* は絶滅危惧種に指定されています。しかし、園芸種として根強い人気があるため、人工栽培によって完全に絶滅することはありません。

カカ・ビークを過ぎるとしだれ枝の巨木が見えてきます。



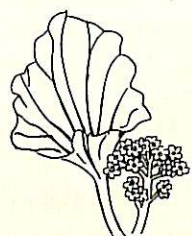
15. リム
(*Dacrydium cupressinum*)
マキ科 植樹 1880年代

森林に君臨する巨木には珍しく、優雅な形状の樹種です。通常は樹高30~40メートル、樹幹の直径1~1.5メートルまで成長しますが、残念なことに、ご覧いただいている木は初期の城主によって3分の1も切り取られてしまいました。3千700万年前のあいだ、ほとんど変化のない太古の球果植物です。

深みを帯びた美しい赤色の木肌により、過去の木材伐採人たちは「赤松」の通称で呼んでいましたが、現在ではマオリ名のリムとしてのみ知られています。ヨーロッパ人の初期開拓期から当地原産の主要木材として使われてきましたが、植林されることは稀なため資源が乏しくなっています。

ニュージーランド各地の低地や山岳森林地帯に生息しています。

リムの巨木の下をご覧ください。つやつやとしたハーブの大株があります。

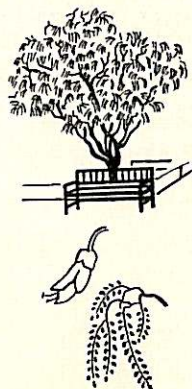


16. チャタム島忘れな草
(*Myosotidium hortensia*)
ムラサキ科

通称からその原産地がおわかりいただけると思いますが、草食哺乳類によって食べ尽され、今ではチャタム島でも限られた地域にしか残っていません。

うっそうとした熱帯植物のような葉を見ると原産地に疑問を抱きますが、春になって見事な花頭が現れるとその疑問がさらに深まります。幅15センチの花頭は楚々とした1.5センチほどの青い花で満たされます。今日では白とピンクの花が咲く品種も生産されています。白い品種は大駐車場に隣接するガーデンでご覧いただけます。

小道を右に進み、ベタンク場まで進んでください。ツゲの生垣の左側に本日の散策の最後を飾る小さな木をご覧ください。



17. コファイ
(*Sophora tetraptera*)
マメ科 植樹 1976年

ニュージーランド国内には通称コファイとして知られる3種の *Sophora* が生息しています。

互いに国の象徴の地位を争うポフツカワと異なり、*Sophora* は全国に自生するため、多くの人はコファイこそ国の象徴としてふさわしい花であると考えます。黄色の花に埋め尽くされたコファイの春の姿をご覧ください。機会があれば、その理由もおわかりいただけるでしょう。

さて、散策路をさらに進み、ヒマラヤスギの高い枝の間に目を凝らしてみてください。散策の締めくくりに意外なものをご覧いただけるかもしれません。

太古の世界

世界から隔離したニュージーランドは、太古の動植物が生息する風変わりな場所です。

地域によっては、3千万年から4千万年前に見られたような見事な植生が残っています。色とりどりの花々が咲き乱れることはなくても、その歴史を感じさせる大きさや自然のままのたたずまいは圧巻です。

自生植物の81%が、ニュージーランドだけに生息する固有種であるということも最大の特徴です。本日の散策ではそのうちの17種をご覧ください。

最も近い隣国は北東に2千キロ離れたオーストラリアですが、両国の動植物はまるで異なるように見えて類似点が多々あります。それはなぜでしょう。

数億年前、ニュージーランドはゴンドワナ大陸と呼ばれる超大陸の一部でした。今日の南極大陸やオーストラリア、南米大陸、アフリカ大陸、マダガスカル、インドもこの超大陸に含まれ、現在ではそのうちの南極大陸とオーストラリアが最も近くにあります。

ニュージーランドは8千500万年前にゴンドワナ大陸から分離し、外来の動植物が定着する可能性が最小限に抑えられました。この大陸分離は、カンガルーなどの初期哺乳類の進化以前、花をつける植物がやっと出現し始めた頃に発生したため、ニュージーランドの動植物は限られた種の中で進化せざるを得ませんでした。その結果、今日まで生存している固有動物の多くは鳥類であり、植物も太古の種と比べて大きな変化がありません。国内の森林地帯の大部分は、今でもいにしえの原生種に占拠されています。

園内をご覧ください。間に、スズリの美しいさえずりをお聞きいただけることでしょう。

散策をお楽しみください。

Margaret Barker



Words by Fiona Eadie
Drawings by Zuna Wright



Camp Road, Otago Peninsula, Dunedin
PO Box 1350, Dunedin
Telephone 03 476 1616, Fax 03 476 1574
larnach@larnachcastle.co.nz www.larnachcastle.co.nz

LARNACH CASTLE

DUNEDIN • NEW ZEALAND

自然植物の 散策路

園内植物観察



まず、外側の舞踏会場入口へ向かい、そこから裏の庭園へ出て散策を始めてください。

1. キャベツ・ツリー、マオリ名：トイイ
(*Cordyline indivisa*)
リュウゼツラン科 植樹 1989年

ニュージーランド山岳地帯の湿地に自生する見ごたえのある植物です。大刀のような葉は1~2メートルまで成長し、アガーベのような樹冠を形成します。成長しきった樹冠は地上6メートル以上の高さに達します。
夏にはミツの香り高い小さな薄色の花に包まれた花穂が数多く枝分かれします。

右側およそ3メートル後方に棒付きキャンディーのような木が見えます。

2. ランスウッド
(*Pseudopanax ferox*)
ウコギ科 植樹 1982年

幼木と成木で形状の異なることがこの種の特徴で、ここでご覧いただくのは成木です。成長にしたがった形状変化はニュージーランドの自生植物に珍しくなく、その理由がこれまでも広く議論されてきました。その中で最も一般的に受け入れられている学説は、絶滅した飛べない鳥のモアから身を守るためではなかったかというものです。
後ほどご覧いただく幼木には、堅いギザギザで囲まれた長くて厚い葉がついています。ご覧いただいている木の樹幹は、成木の特徴であるロープが絡まったような美しい形状を形成し始めています。

ハートの女王の玉座まで進むと、左手に大きな木が見えます。

3. 赤ブナ、マオリ名：タファイラウヌイ
(*Nothofagus fusca*)
ブナ科 植樹 1890年頃

Nothofagus (南極ブナ) 属の北半球の親戚は *Fagus* (ブナ) ですが、ニュージーランドの自生種はすべて常緑樹です。*Nothofagus* は森林の大部分を占拠する種であり、特に南島では1~2種のブナの木だけで形成された森を各地で見ることができます。成木は高さ30メートル、樹幹の太さ2メートルにまで成長します。
密度が高く強度に優れたタファイラウヌイのレッドウッドは、これまで多岐にわたって使用されてきましたが、現在では主に高級家具などに使われています。

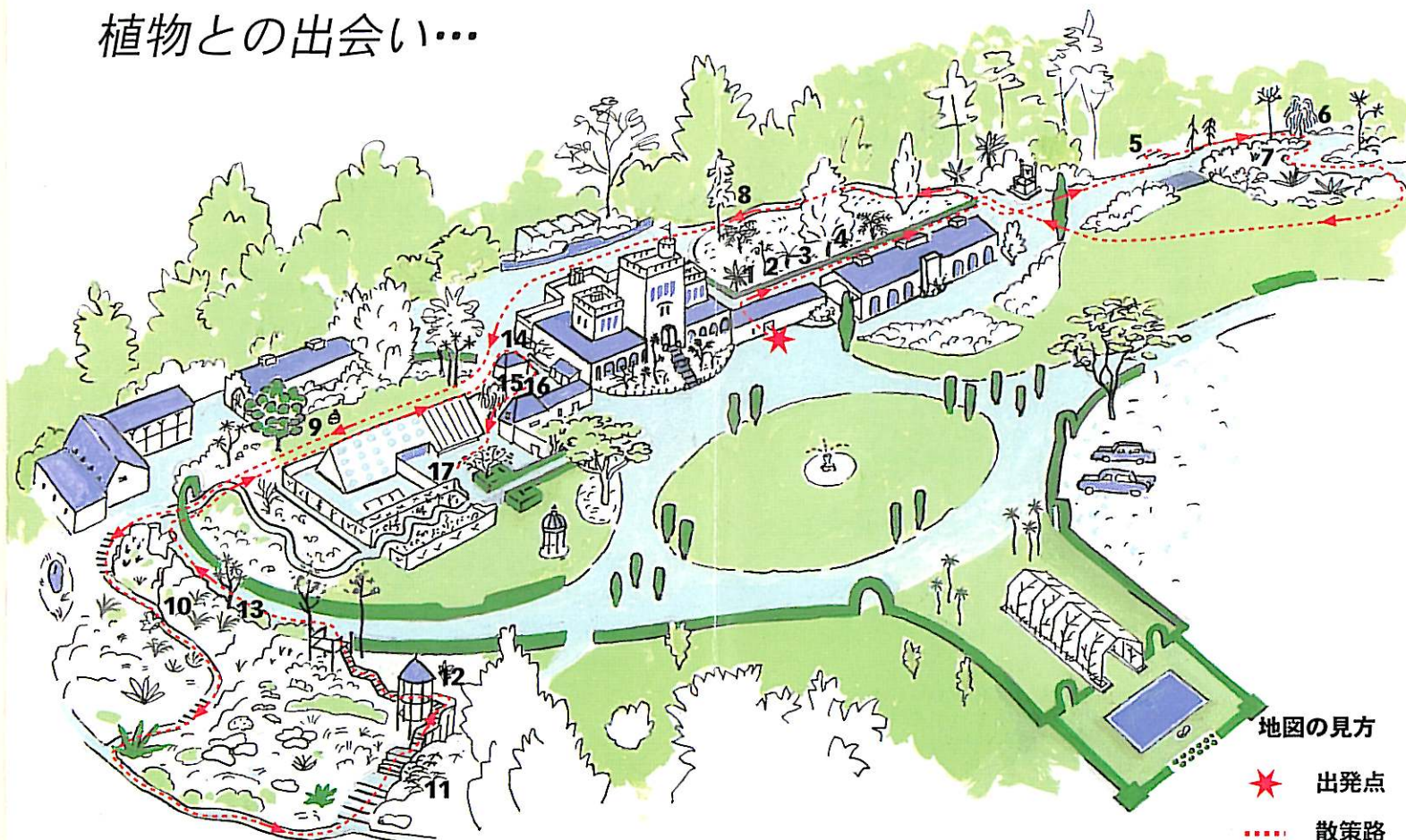
…さらに進むと、同じ方向に木生シダが見えてきます。

4. シルバー・ファーン、マオリ名：ボンガ
(*Cyathea dealbata*)
ヘゴ科 植樹 1984年

ニュージーランドの象徴とされる植物です。ぱっと見た限りでは、なぜこの名前がついたのかわかりにくいのですが、葉を裏返してみると納得できます。
ご覧いただいている木は、このまま成長すれば高さ4~5メートル、葉状体の長さ2メートルに達します。
その昔、マオリ人は裏返した葉状体を道に置き、夜間の道しるべとして使いました。

玉座を右へ曲がってから左手の砂利道へ進んでください。砂利道を右へ進み、石の階段を下りてブロードベイガーデンでハーブの大株をご覧ください。

植物との出会い...



地図の見方

★ 出発点

..... 散策路

14 植物

5. *Stilbocarpa polaris*
ウコギ科 植付 2003年

亜南極に位置する島々の海岸性ハーブ地や灌木地に自生するハーブです。
面白いことに、これらの環境ではこうしたハーブの大株が珍しくありません。ご覧いただいている株も、冷たい南風を受けるこの場所に定着しています。
初夏に小さいカリフラワーのような花頭をつけた後、黒豆のような実がなります。

階段を上る際に左側をご覧ください。#2でご覧いただいたキャベツ・ツリー(*Pseudopanax ferox*)の幼木があります。階段を上りきったところで左へ進むと、小型の柳のような植物が見えます。

6. ウィーピング・ブルーム
(*Carmichaelia stevensonii*)
マメ科 植樹 1984年

すでにお気づきかもしれませんが、ニュージーランドの自生植物の多くは満開の花をつけるものは少なくとも、印象的な際立った形状をしています。しかし、ご覧いただいているこの樹種は独特な形状と花の両方を備えています。
大量の枝が葉の役割をするため、葉は全くつきません。夏に薄紅がかった紫色の小さい花で覆われた姿は見事なものです。

散策路をさらに進むと、刀をかざしたような銀色のハーブが見えてきます。

7. *Celmisia semicordata*
キク科

ニュージーランド固有の全58種は国内にしかありません。その中でも、幅10センチもの大輪の花を咲かせる *C. semicordata* は南島の亜高山性の植生のみに自生するものです。花の中心は濃い卵黄色で、その周りを白い花びらのような小筒花が放射線状に囲んでいます。花は夏に見ることができ

玉座のところで戻り、その先左側の散策路を進みます。3分の2ほど進んだところで右手にピラミッド型の木が見えてきます。

8. カウリ
(*Agathis australis*)
ナンヨウスギ科 植樹 1980年

地上から最初の枝までの高さ20メートル以上、樹幹の直径7メートル、樹高50メートル以上にも成長する巨木です。初期開拓者がニュージーランドに降り立った当時、北島北部にはこの巨木の大森林がありました。大きさだけでなく、その樹齢も驚くべきものです。現在も残る最古のカウリの樹齢は2100年と推定されます。
木目がまっすぐで密度が高く、耐久性と使いやすさに優れ、ほとんど節のないカウリの木は木材として最適です。ヨーロッパ人の入植前には120万ヘクタールもあったカウリの大森林は、現在では142ヘクタールしか残っていません。

この樹種は1億5千万年前のジュラ紀に進化を始めました。同属の3属43種は南半球だけに生息しています。

ここまでが熱帯雨林区です。このまま本館を左手に見ながら進んでください。小石が敷き詰められた道の先を左に曲がり、願いの井戸がある芝生のところまで進むと立派な巨木が見えます。

9. 北方ラタ
(*Metrosideros robusta*)
フトモモ科 植樹 1890年代

この地域に自生する種類の植物ではなく、見るからに樹齢も重ねていることから、ラーナック卿の時代に植樹されたものと考えられています。
一般的に知られる近縁の樹種にはポフツカワがありますが、濃緑色の葉を持ち、夏には真っ赤な花をつける北方ラタも人目を引きま

ヒイラギの大きな生垣まで進むと、サウスシーガーデンに続く木の階段があります。目の前の道をそのまま進むとヤシの林が見えてきます。その左手をご覧ください。

10. ニカウ
(*Rhopalostylis "Chatham Is."*)
ヤシ科 植樹 2002年

ニカウはニュージーランドで自生する唯一のヤシです。ここでも強風に見舞われることがありますが、この品種は常に強風にさらされるチャタム島から移されたものです。
沿岸地帯あるいは内陸地に限らず森林性の樹種です。成長は非常に緩慢で、樹幹の形成が始まるまでに15年以上かかります。樹高を伸ばす前に葉状体が最大の大きさ(2~3メートル)まで成長します。若芽や花茎はマオリ人や初期のヨーロッパ人開拓者によって食用とされました。

散策路を進んだ先には、多数のポフツカワ (ニュージーランドのクリスマスツリー、*M. excelsa*) が植えられています。そこから左へ進み、大きな木の階段を上ります。最初の踊り場で右手をご覧ください。最初の踊り場で右手をご覧ください。最初の踊り場で右手をご覧ください。

11. *Carmichaelia williamsii*
マメ科 植樹 2001年

C. williamsii の平たく幅のある枝は *C. stevensii* (#6) のように光合成を行います。 *C. stevensii* (#6) と異なる点は、よく見ると小さな葉の固まりがついていることです。
薄黄色の花は長さ1~2センチでエニシダのような形をしています。ニュージーランドに生息するエニシダ種で黄色の花がつくものはこれだけです。花の盛りは晩夏と冬ですが、一年を通じて断続的に花が咲きます。
自然はカレンダーに関係なく、気まぐれなことをするものです。
この株は特にこの環境が気に入っているようで、信じられないほどの速さで成長を遂げています。